

第69回全国植樹祭開催記念「“もり”がたりシンポジウム」

日時 平成28年2月28日(日) 14:30～16:40

場所 グランパークホテルパネックスいわき さくら大宴会場

基調講演

「東日本大震災による被害と再生の取組」

講師 千葉大学園芸学研究科教授 小林 達明 氏

山木屋地区の丘陵から丘間農地の線量について、半減期補正を行って比較すると、除染する前の期間(2015年11月より前)はほとんど変わっていない。これは、放射性物質の移動がほとんどないことを意味している。

チェルノブイリ事故後の森林の放射性セシウムの動きは、各種が林冠・樹皮から土壌へ移行による急速な再分布に特徴づけられる初期フェーズと、経根吸収によるゆっくりとした変化により特徴づけられる定常フェーズに分けられるが、現在の山木屋地区は概ね定常フェーズに移行している。

林冠から林床への供給量のうち、4分の3以上はリターフォール(落ち葉)。2014年から2015年で変化がないことから、定常フェーズに移行していると考えられる。林外への流出量で最も多いのもリターフォールであるが、供給量と比較すると圧倒的に少なく、林外へ流出しにくく、林間で循環していることがわかる。

林床処理を行うと土壌放射能は著しく減少する。林地供給量も減少はするが、土壌ほどは減少しない。林外への流出量のほうが、減少幅が大きい。

山菜(植物)の放射能は、庭先にあるようなものは概ね問題ないが、春先の山菜はやや高い。キノコの場合はほとんどのものが、放射能が高い。事故前のコウタケが360Bq/kgあったが、これは過去の核実験の放射性物質を吸っているもの。大雑把に言えば、空間線量率が $0.8\mu\text{SV/h}$ のところにあるものであれば取っても大丈夫であるが、キノコの場合は注意が必要。

千葉県は九十九里浜も5m以上の津波があり、死者も出た。特に被害が大きかったのが旭市。九十九里浜沿いは基本的に海岸林があるが、旭市飯岡地区は漁師町であり海岸林を設けていなかった。山武市には海岸林があるが、海水浴場に行くために切り開かれている箇所では被害が大きかった。

海岸線沿いに1m幅、海岸林の幅をもう一辺とする長方形内にある主樹木の胸高直径の合計値を“厚み”という。浸水深・厚みと家屋被害度の関係を見れば、同じ浸水深であっても、厚みがあれば被害は軽減されている。

千葉県は防潮堤を砂丘で作っている。山武市は防潮堤の内側、旭市は土地の余裕がないため防潮堤の外側に盛り土をして植生試験を行った。建設残土盛土のうち、埴壤土が多いとクロマツの生存率が下がっており、客土の不透水性が問題となる。また、山武市では現

地砂土でスダジイを植栽したが、夏場に土壌の含水量が下がり枯死が多くなった。旭市では、山武市より海岸に近い飛来塩分量は多いが、建設残土と現地砂土の混合盛土でスダジイを植栽したところ、萌芽再生してある程度生き残った。

震災後、住民が海岸林の重要性を感じるようになった。海岸林を維持するためには住民が海岸林の必要性を忘れずに、継続的に面倒を見るのが肝要である。

パネルディスカッション

「人に寄りそう森・森に寄りそう人～森林を活かす人材づくり～」

コーディネーター	山形大学農学部食料生命環境学科准教授	早尻 正宏 氏
パネリスト	いわき市森林組合代表理事組合長	田子 英司 氏
	福島県キャンプ協会理事	松前 知恵子 氏
	福島県指導林家連絡協議会会長	緑川 平壽 氏
	日本EIMY研究所主任研究員	星 昇 氏

(早尻氏)

パネリストお一人ずつ、自己紹介と森林との関わりについてお話し願いたい。

(田子氏)

森林組合の主なフィールドは主に上流地域の山林であったが。震災後は海岸防災林の復旧も対象にしている。

森林組合で行っている森林教室では、子供たちを現場に連れて行くなど、森林に興味を持ってもらえるよう工夫している。

(松前氏)

キャンプ協会では、ここ3年間は災害対応キャンプを実施しており、いろいろな分野の人たちの交流を図っている。もりの案内人では小学校・中学校の学習体験の指導、企業のイベント、公共団体の催し物に参加している。

(緑川氏)

昭和45年に本県で開催した第21回全国植樹祭において、緑に満ちあふれた国土を造る旨を決意表明した。それ以降、田人林業研究会や指導林家として林業振興に参画している。

(星氏)

EIMYは“Energy In My Yard”の略で、再生可能エネルギー等をはじめとするエネルギー資源を地域内で自給することで山村ならではの豊かな暮らしを实践する研究を行っている。東北大学が発祥で、現在各地で実施されているが、その第一番目の実施場所が天栄村湯本地区であった。

天栄村で東日本大震災を経験したが、震災直後であっても、地域には米も漬け物も薪ストーブもあり、住民の方々が普通に暮らしていた様子を見て、改めて森林資源の価値を実感した。

(早尻氏)

いわき地方の森林整備の概況は。

(田子氏)

いわき地方の山林にも放射性物質は降り注いだ。一部を除いて放射線量は低く、風評被害も一時的であったため、短期間で営林活動に戻ることができた。

津波被害でかなりの住宅が破壊されたため、住宅の着工戸数が増えて木材の消費は増えているが、木材価格を引き上げるほどの状況ではない。

課題は2つ、1つは木材価格で昭和60年代から下がり続けており、山の所有者が木を伐採しても再生林しなくなった。もう1つは、自分の山の場所がわからない森林所有者が増えてきているが、これは時間が経つほど解決が難しい。

森林をどのように将来に引き継ぐか。ふくしま森林再生事業等で森林内の放射性物質の低減を図る、森林環境税を活用して間伐事業を駆使する等により森林整備を進めなければならないと考える。

(緑川氏)

田人林業研究会では、木材価格の低下には良質材で対抗するしかないだろうと考え、資材生産に力を入れることとし、これを研究会の大きな目的とした。研究会では、磨き丸太の加工、販売を行って収入を上げる取組を行っている。

また、地域の林業に寄与することをもう1つの目的としている。子供たちに森林の良さを伝える取組を行っているが、震災以降は野外活動が制限されてしまった。現在は屋内での木工クラブなどで活動を継続している。

(早尻氏)

林業の担い手を増やすためには、まず森林に興味・関心を持ってもらう必要があると思うが、キャンプの事例からどうか。

(松前氏)

森林のことを知ってもらうためには、子供たち、家族に森に足を運んでもらうことが大事。キャンプ協会では、遊びの中で自然に親しみ、理解を深めて記憶に残す、知識より興味を持たせることが重要であると考えている。

(早尻氏)

地産地消、新エネルギーの観点から御意見いただきたい。

(星氏)

里山が、現在ほど緑豊かであった時代はない。第2次大戦後に先人が山に木を植えてしていまの緑豊かな里山がある。言い換えれば、先人が未来のために資源を蓄えてくれたもので、現在はそれが目一杯の状態にある。我々やもっと若い世代には、これを活用していく役割があるのではないか。

再生可能エネルギーとして発電ばかりが注目されるが、私が実践しているのは薪ストーブである。薪ストーブのいいところは、使っていると森のことを考えること。森に入るし、木を切った後の環境の変化もわかる。これを環境教育として小学校で教えている。

(早尻氏)

林業の担い手を育てるということについて伺いたい。

(田子氏)

組合として県外から2名の若い職員を採用したが、彼らは森林林業に関して非常に意識が

高い。少数であっても必ず意識の高い若者はいると実感するとともに、林業関係者や行政が真剣に担い手を育てようとしていたか疑問を感じている。

全国植樹祭でも、ただ植えただけではダメで、そのバトンを受け継ぐランナーを育成することが必要だ。

(松前氏)

子どもたちが遊びの中で仕事を体験することが大切。全国植樹祭のアトラクションの中に、少しでも森林とふれあう機会を入れていただければよいのでは。

(緑川氏)

子どもが小さいうちから、森林に関わらせることが大事だと思う。

(星氏)

都会に住んでいる人の中にも、農林業に興味を持っている人はいると思う。そういった人が農林業をやりたいと思ったとき、それを受け入れてくれる地域を作らなければならない。

(早尻氏)

震災以降、森と人との関わりは新たなステージに入ったものと思っている。全国植樹祭に向かって森と人との関わりを深める取組を推進してもらうのと同時に、福島県の取組を強く全国に発信していただきたい。